

## 死海写本における天使論と唯一神論の危機

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-02-02<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 原口, 尚彰<br>メールアドレス:<br>所属:                  |
| URL   | <a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24418">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24418</a> |

# 死海写本における天使論と 唯一神論の危機<sup>1</sup>

原 口 尚 彰

## 1. 問題の所在

中間時代のユダヤ教文書には発達した天使論が見られ、死海写本にも独特の天使論が見られる。特に、死海文書『安息日の犠牲の歌 (4QShirShabb; 11QShirShabb; MasShirShabb)』(以後、『安息日の歌』と略記する)には、天使たちによる天上の礼拝と、7人の大天使たちの祭司的活動が詳細に描かれている<sup>2</sup>。この歌は黙示録の天上の礼拝の表象や、ヘブル書の反天使論の背景を示す資料として注目されている<sup>3</sup>。他方、この歌は神と人間の中間的存在である天使の神性の側面を

<sup>1</sup> 本稿は2006年6月17日に宮城学院大学で行われた日本基督教会東北支部会で行った1日頭発表に加筆したものである。

<sup>2</sup> この文書の校訂本は、C. Newsom, *Songs of the Sabbath Sacrifice: A Critical Edition* (Atlanta: Scholars Press, 1985); C. Newsom, *The Dead Sea Scrolls. vol. AB: Angelic Liturgy* (Louisville, KY: Westminster/ J. Knox, 1998); E. Martinez / E.J.T. Tigchelaar / A.S. van der Woude, *Discoveries in the Judaean Desert. vol. 23: Qumran Cave 11* (Oxford; Clarendon, 1998); B. Nitzan et al., *Discoveries in the Judaean Desert. vol. 29: Qumran Cave 4, XX: Poetical and Liturgical Texts* (Oxford; Clarendon, 1999) がある。さらに、ファクシミリ版は、E. Tov ed., *The Dead Sea Scrolls on Microfiche: A Comprehensive Facsimile Edition of the Texts from the Judean Desert* (Leiden: Brill, 1993); T.H. Lim (in consultation with P.S. Alexander), *The Dead Sea Scrolls Electronic Reference Library* (vol. 1; Leiden: Brill, 1997) を参照。

<sup>3</sup> 拙稿「死海写本『安息日の犠牲の歌』とヘブル書1-2章」『教会と神学』第34号(2001年)117-138頁を参照。

強調しており、初期ユダヤ教における天使崇拝の現象を認めることが出来る。

天的存在である天使たちの存在は唯一の神であるヤハウェを中心とする一元的構造が内包する多元的構造と言える。旧約聖書やユダヤ教文書において、天使は天上で神に仕え、神を讃美し、神の使者としてその意思を人間に伝える役割を持つが、天使が天的存在である面が強調され過ぎると、唯一神論の前提を揺るがしかねない問題を含んでいる。天使崇拝が天使礼拝の域に至ると、神ならないものを拝むことになり、モーセの第一戒と第二戒に抵触することになるからである。新約聖書に於いて天使礼拝が非難されているのは、このためである（コロ2: 18; 黙19: 10; 22: 8-9を参照）。死海写本の天使論は非常に高度な天使崇拝の傾向があり、唯一神論の前提の下で天使崇拝が強力に展開され、一元的構造の内部に多元的要素を包含する結果、多神論に近付く現象が認められる<sup>4</sup>。本研究は、死海写本の天使論の分析を通して、初期ユダヤ教における唯一神論の危機の問題を考察する。

## 2. 旧約・ユダヤ教の唯一神論と天使論

### 2.1 旧約・ユダヤ教における唯一神論の形成と継承

モーセの第一戒は、イスラエルを奴隷の家であるエジプトの地から導き出した神ヤハウェ以外に神（または神々）があってはならないと

---

<sup>4</sup> K. Koch, "Monotheismus und Angelologie," in *Ein Gott allein?* (hrsg. v. W. Dietrich / M.A. Klopstein; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1994) 565-566 を参照。

し(出 20: 3; 申 5: 7), 第二戒は, 神の像を造って拜んではならないと述べている(出 20: 4-6; 申 5: 8-10)。しかし, これらの戒めは他の神々の実在を必ずしも否定するものではなく, ヤハウェのみ神とし, ヤハウェだけを拝み, ヤハウェだけに仕えることを要求するに留まっている。つまり, 十戒の立場は, 唯一神論ではなく, 拝一神論の段階に属する<sup>5</sup>。

申命記 6 章の所謂シェマーは, 「聞け, イスラエルよ, 主は私たちの神であり, 主は唯一である」という言葉に始まる(申 6: 4)。但し, 申命記は主以外の神々の実在を必ずしも否定しておらず, この言葉は十戒における他の神々を礼拝することの禁止と同様に, 主のみを拝し, 主のみに仕えることを求めるに留まる<sup>6</sup>。申命記はむしろ, 乳と蜜が流れる約束の地には他の諸民族が拝む他の異教の神々が存在し, イスラエルの民を魅了する危険があることを前提に, それらを拝むことを強く戒め, 非難している(申 6: 14; 7: 16; 8: 19; 28: 36; 32: 16-17 他)。

イスラエルにおいて唯一神論の確立が確認されるのは, 第二イザヤの時であり, この預言者は主以外の神は存在しないことを繰り返し述べている(イザ 43: 10; 45: 5, 14-25; 46: 9)<sup>7</sup>。第二イザヤによれば,

<sup>5</sup> 関根清三「旧約的一神教の再構築—旧約学・哲学との対話から」『日本の神学』第 44 号 (2005 年) 18-19 頁, 深津容伸「一神教をめぐる—旧約聖書, ユダヤ教, キリスト教」『基督教論集』第 46 号 (2003 年) 16-17 頁を参照。但し, 深津が第二イザヤの立場まで拝一神教としている点は問題である。

<sup>6</sup> 宮田玲「シェマーにおける『一(エハド)』理解」『基督教研究』第 65 巻第 2 号 (2004 年) 87-106 頁を参照。

<sup>7</sup> Lang, B. "Zur Entstehung des biblischen Monotheismus," *ThQ* 166 (1986) 135-142. G. von Rad, *Theologie des Alten Testaments* (2 Bände; München: Kaiser, 1960-1962) 2.223-225, 240; J. J. Scullion, "God in the OT," *ABD* 2.

ヤハウェは「わたしである。わたしの前に神は創られず、わたしの後に存在しない」と述べる（イザ 43: 10）。さらに、45: 5 は、「私は主、他にはいない。わたし以外に神はいない。」と述べる（イザヤ 43: 10; 46: 9 も参照）。第二イザヤの唯一神論は、ヤハウェだけが世界の創造主であり、イスラエルを贖う救済者であることに結び付いている。つまり、創造信仰の徹底が、唯一神論の確立の背景となっている<sup>8</sup>。世界の創造者が唯一であるならば、他に存在するものはすべて被造物であり、他の神々は人間が作り出した観念であり、神々の像は職人が石や木や金属を用いて作成した工作物に過ぎないからである（イザ 45: 20; 46: 5-7）。人間が石や木から作った偶像に人を救う力はなく、救いを与える力は天地の創造主なる神のみにある（45: 20-22）。

第二イザヤの唯一神論は初期ユダヤ教に継承され、ヘレニズム・ユダヤ教文献はしばしば異教の神々を人間の作った偶像として言及する（シビュラ 3: 11-16; ヨセフス『古代誌』4.201; 5.112; 8.335; フィロン『十戒総論』64; 『ガイウス』115; 『世界の創造について』170-172

---

1041-1048; W. Dietrich, "Über Werden und Wesen des biblischen Monotheismus. Religionsgeschichtliche und theologische Perspektiven," in *Ein Gott allein?* (hrsg. v. W. Dietrich / M.A. Klopstein; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1994) 19, 21; 月本昭男「古代イスラエル唯一神教の成立とその特質」竹内整一・月本昭男編『宗教と寛容』大明堂, 1993年 165-166頁を参照。関根清三, 前掲論文は、第二イザヤの唯一神論的歴史観が歴史の実態とはかけ離れていたことを指摘し、唯一神論は思想として成立していないとする。これは歴史的事実としての唯一神論の成立と、思想としての唯一神論の妥当性の問題とを混同した議論である。

<sup>8</sup> 第二イザヤの唯一神論の背景となる、補囚期後期のバビロニアにおける政治史的・宗教史的背景については、M. Albani, "Deuterjesayas Monotheismus und der babylonische Religionskonflikt unter Nabonid," in *Der eine Gott und die Götter* (hrsg. v. M. Oeming / K. Schmid eds.; Zürich: Theologischer Verlag, 2003) 171-201を参照。

他)。特に、ソロモンの知恵 13 章は、異教の神々は人間がその意匠に従って造った偶像であり、人を救う力を持たないことを指摘し、異邦人社会の倫理的混乱の根本原因を真の神を知らず、偶像礼拝に耽ることに見て非難している。

この段階以降になると、「主は唯一である」という申命記の言葉も(申 6: 4) 唯一神論の立場から解釈され、ヤハウェ以外に神は存在しないという意味で解釈されたと推定される。(I コリ 8: 4-6 を参照)<sup>9</sup>。初期キリスト教会もユダヤ教の唯一神論を継承し、異邦人宣教の中で、天地を創った真の神以外に神はいないことを強調していた(ロマ 1: 18-32; 3: 30; 使 14: 15; 17: 23-31; I コリ 8: 4-6; I テサ 1: 9-10 を参照)。

## 2.2 旧約・ユダヤ教の唯一神論と天使論

旧約聖書には、天的存在である天使が登場する。天使は神ではなく、神に従属する霊的存在である。天使は天上の宮廷において、王であるヤハウェの王座の周りに侍る集団を構成しており、様々な機能を与えられている(創 6: 2, 4; 申 32: 8; ヨブ 1: 6; 2: 1; 38: 7; 詩 29: 1; 82: 1-8; 89: 6-8)。天上の会議の表象は、元々カナン起源であるが、ヤハウェ宗教に取り込まれ、神々は天使と再解釈された<sup>10</sup>。天使たちは、「神の子ら(בְּנֵי אֱלֹהִים)」(創 6: 2, 4; ヨブ 38: 7)、または、「神々

<sup>9</sup> 拙稿「第一コリント書における神の問題」『教会と神学』第 41 号(2005 年) 68-71 頁。

<sup>10</sup> Dietrich, 19-20; F.M. クロス(興石勇訳)『カナン神話とヘブライ叙事詩』日本基督教団出版局, 1997 年, 98-100, 241-244 頁; 北博「『天上の会議』の表象と預言者意識」金井美彦・月本昭男・山我哲雄編『古代イスラエルの預言者の思想世界』新教出版社, 1997 年, 106-125 頁を参照。

の子ら (בני אלים)」(詩 29: 1; 89: 7) と呼ばれる<sup>11</sup>。例外的箇所において(詩 82: 1, 6; 97: 7, 9), 天使たちは「神的存在, 神々 (אלהים)」とも呼ばれているが, そこでは天使を神格化して崇拜するのではなく, むしろ天使に対する否定的見解が述べられている<sup>12</sup>。天上の会議の表象における天使の存在は唯一神論の枠内に収まっており, それを揺るがす天使崇拝の現象はまだ見られないと言える。天使たちは天上にあって, 神を讚美し, 神に栄光を帰するように呼び掛けられている(詩 29: 1; 103: 20-21; 148: 1-2 他)。また, 天使の一团は, ヤハウェに仕える天の軍勢とも想定されている(申 33: 2; ヨシュ 5: 14-15; 王上 22: 19)。

他方, 天使は神の使者として, 地上に遣わされ神の意思を人間に伝える役割を持ち, מלאך (御使い) と呼ばれる(創 16: 7, 9, 10, 11; 出 3: 2; 32: 34; 民 20: 16; 士 6: 11-12, 21-23; 13: 3-18; 王下 1: 3, 15; 13: 18 他)。天使のお告げは, 神の言葉の告知と受け取られた(創 16: 13)。しかし, 神の使者である天使の顕現が媒介なしに神の臨

<sup>11</sup> 申 32: 8 の「イスラエルの子ら」に代えて, 死海写本 4QDU<sup>a</sup> は「神の子ら」と読み, 七十人訳は「神の天使達」と訳している。BIIS の脚注は, 死海写本断片の復元がまだ十分に進まない頃の資料に基づいて, בני אלים と読んでいるが, より復元が進んだ写本断片はむしろ בני אלהים の読みを示している。この点については, P. W. Skehan, "A Fragment of the 'Songs of Moses' (Deut 32) from Qumran," *BASOR* 136 (1954) 12-25; idem., "The Scrolls and the Old Testament Text," in *New Directions in Biblical Archaeology* (ed. D.N. Freedman/ J.C. Greenfield; Garden City, NY: Doubleday, 1969) 89-100; R. Hanhart, "Die Söhne Israels, die Söhne Gottes und die Engel in der Masora, in Qumran und in der Septuaginta," in *Vergegenwärtigung des Alten Testaments* (hrsg. v. C. Bultmann /W. Dietrich / C. Levin; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002) 170-178 が詳しく論じている。

<sup>12</sup> 詩 8: 6 の אלהים を七十人訳は, ἀγγελοι (天使) と訳し, それをヘブ 2: 6 が引用している。

在の記述に移行することがあり（創 21: 17；出 3: 2-6）、天使の顕現と神の臨在の境界線は時として流動的になっている<sup>13</sup>。このような場合、人々は天使の顕現に際し、畏れの念を抱いている。

補囚期以後の旧約文書やユダヤ教文書になると、天使論は大きく発展を遂げ、幻の意味を説き明かす解釈天使の役割や（ゼカ 1: 7-17；2: 1-4；2: 5-17；3: 1-10；4: 1-14；5: 1-4；5: 5-11；6: 1-8）、神の裁きを宣告し、執行する役割が加わって来る（エチ・エノ 89: 61-77；90: 14-20；スラ・エノ 19: 5）。天使達の間には位階が存在し、最高位の大天使達に主導的な役割が与えられる（トビト 3: 17；12: 15；エチ・エノ 9: 1；20: 1-7；40: 8-10 他）。ダニエル書では、天使ミカエルが終末におけるメシア的役割を与えられている（ダニ 10: 13, 21；12: 1）。

### 3. 死海写本の唯一神論と天使論

#### 3.1 死海写本の唯一神論

死海写本は前 2 世紀から後 1 世紀の間に筆写されたものであり、エッセネ派の一部であったクムラン教団の信仰の特色を反映している。天使論に関しても、この時代のユダヤ教一般に見られる傾向を共有すると共に、クムラン教団特有の特色を表している。また、個々の文書によってかなり違う特色が見られるので、天使の問題が集中的に取り扱われている代表的文書を個々に取り上げた後、全体像の特色を

<sup>13</sup> この点を、C. Newsome, "Angels," *ABD* 1.250 が指摘している。



唯一神論との関わりという視点から考察する必要がある。

死海文書にはクムラン教団内部において作り出された文書と教団外で作成された後に持ち込まれた文書とがある。『宗規要覧(1QS)』や『戦いの書(1QM)』や『感謝の詩編(1QH)』は、用語法や思想の点から言ってクムラン起源の文書であるとされている。『安息日の歌』の方は、専門家の間で意見が分かれており、F.G. Martinez はクムラン起源を肯定し<sup>14</sup>、C. Newsom は否定している<sup>15</sup>。しかし、仮に『安息日の歌』が外から持ち込まれたものであったとしても、この文書の写本は死海文書の中に何通りも存在しており、共同体の中で愛読されたことを示している。クムラン共同体は『安息日の歌』の思想や象徴世界に共鳴していたのであり、思想的に異質な文書ではないと推定出来る。

天使論を個別的に検討する以前に、死海写本の神観を瞥見しておこう。死海写本において、神は אלוהים と (マソラ本文の正書法では אלהים) と呼ばれることは比較的稀であり (11QT 48.7, 10 他)、多くの場合は, אל (1QM 2.2, 5; 3.2, 3, 4, 5; 1QS 1.2, 7, 8; 2.2, 6, 8 他多数)、または, יהוה (11QT 15.13; 21.3, 8, 10, 16; 22, 14, 16 他多数) と呼ばれている。神が唯一であるということ述べる申命記 6: 4 は、申命記の写本の断片 (4QDt<sup>p</sup>) や経札 (フュラクテリア) に保存されている (4Qphyl<sup>c</sup>; 8Qphyl)。この時代のユダヤ教文書の例に漏れず、死海写本も唯一神論を前提にして申命記 6: 4 を解釈していたと想定出来る。さらに、異教の神々を拜むことを禁じる十戒も、クムラン出土の多くの

<sup>14</sup> F.G. Martinez, "Apocalypticism in the Dead Sea Scrolls," in *The Encyclopedia of Apocalypticism* (3 vols; New York: Continuum, 1998) 1. 183.

<sup>15</sup> C. Newsom, *The Dead Sea Scrolls. vol. AB: Angelic Liturgy* (Louisville, KY: Westminster/ J. Knox, 1998) 4-5.

経札(フェラクテリア)に記されており(1Qphyl; 4Qphyl<sup>a</sup>; 4Qphyl<sup>b</sup>; 4Qphyl<sup>c</sup>; 4Qphyl<sup>d</sup>; 4Qphyl<sup>e</sup>; 4Qphyl<sup>f</sup>; 4Qphyl<sup>g</sup>), 日常的に唱えられていた。『神殿巻物(11QT)』は、偽預言者の勧めに従って他の神々を拜むことに対して強い警告を発している(11QT 54.1-21)。

### 3.2 死海写本の天使論

#### 3.2.1 『宗規要覧(1QS)』

クムラン教団は神と天使たちで構成される天上の世界の实在を信じ、真理を知る義人の集まりである自分たちは天使たちと共にいると確信していた。つまり、「光の子ら」(1QS 1.9; 3.23)である自分たちは、「光の霊」(3.25)、あるいは、「聖なる者たち」(1QS 1.5, 10)、または、「天の子ら」(1QS4.22; 11.8)と呼ばれる天使たちと共に、「闇の子ら」(1QS 1.10)や「闇の霊」(3.25)に対峙していると考えていた<sup>16</sup>。

#### 3.2.2 『戦いの書(1QM)』の天使論

『戦いの書(1QM)』は、終末時の善の勢力と悪の勢力の戦いについて書かれた書物である。クムラン共同体の成員たちが属している「光の子ら」(1QM 1.1, 9, 11)は、悪の勢力である「闇の子ら」(1.1)と戦い、打ち倒すために、祭司に率いられた軍団を組んでいる。天上には神の玉座の前に集う天使たちの集団が存在する(1.10; 12.1; 14.16; 17.7)。終末の戦いは地上における善と悪の勢力の戦いであると同時に、「偉大なる天使」(17.6)と呼ばれる天使ミカエル(9.15-16; 17.6-

<sup>16</sup> M.J. Davidson, *Angels at Qumran* (Sheffield: JSOT, 1992) 155.

7) に率いられた天使の軍団 (7.6; 12.1, 8) と、ベリアルに率いられた墮天使たちの軍団 (1.1; 12.12) の間に展開される戦いという性格を併せ持っている<sup>17</sup>。終末の戦いは、天使たちが挙げる鬨の声によって開始される聖なる戦いと考えられていた (1.11)。

天使たちは、「御使い (מלאכים)」 (7.6; 12.1, 4, 6) とも「神的存在、神々 (אלים)」 (1.10, 11; 14.16; 17.7) とも「霊 (רוחות)」と呼ばれる (1QM 12.9; さらに、1QS3.25; 4QBer<sup>a</sup> [=4Q286] 2.1 を参照)。天使を天の宮廷で神に仕える霊と呼ぶことは、ユダヤ教黙示文学や (ヨベ 2: 2; エチ・エノ 15: 4, 7, 10)、初期キリスト教文献に見られる (ヘブ 1: 7 [cf. 詩 104: 2-3]; 黙 1: 4; 2: 7; 4: 5; 5: 6; 14: 13)。「聖なる者たち (קדושים)」 (1QM1.16; 12.1, 8; 1QSb 1.5, 10, 26) である天使たちと共にある軍団として、クムラン教団は清浄の規程を厳しく守ることを自らに課していた (1QM7.5-6)<sup>18</sup>。

### 3.2.3 『感謝の詩編 (1QH)』の天使論

天使たちは、「御使い (מלאכים)」 (9 [1].11; 14 [6].13)、「霊 (רוחות)」 (1QH 5 [13].3; 9 [1].11) とも「聖なる者たち (קדושים)」 (1QH 11 [3].22; 19 [11].12; 25 [frags. 5 + 56.1].3) とも呼ばれる<sup>19</sup>。他方、『感

<sup>17</sup> Davidson, 213-221.

<sup>18</sup> Davidson, 230-231; F.G. Martinez, "Apocalypticism in the Dead Sea Scrolls," *The Encyclopedia of apocalypticism* (3 vols; New York: Continuum, 1998) 1.180.

<sup>19</sup> 本稿における『感謝の詩編 (1QH)』の詩編番号は、E. Puech, "Quelques aspects de la restauration du rouleau des hymnes (1QH)," *JJS* 39 (1988) 38-55; F.G. Martinez ed., *The Dead Sea Scrolls* (Leiden: Brill, 1997) に従っている。E. L. Sukenik, *The Dead Sea Scrolls of the Hebrew University* (Jerusalem: Hebrew University and Magnes Press, 1955) による番号は、参考としてカギ括弧の中に示している。

謝の詩編 (1QH)』にも他の死海文書と同様に神と天使たちによって構成される天上の会議の表象が見られる (1QH 3 bottom [11].8; 5 [13].3; 11 [3].22; 12 [4].25; 14 [6].13; 15 [7].28; 23 bottom [2.1].3)。天使たちは「神的存在 (אלים)」 (1QH 3 bottom [11].8; 15 [7].28; 24 top [18].8), または, 「神的存在の子ら (בני אלים)」 (1QH 11 [3].22, 23 bottom [2.1].3) とも呼ばれる。クムラン教団の構成員たちは罪赦されて、聖なる天使たちとの交わりに入ると考えられている (1QH 11 [3].23 bottom [2.1].10; 14 [6].12-13)<sup>20</sup>。

しかし、『感謝の詩編 (1QH)』は、一貫して、神に直接祈り求める文章によって構成されており (1QH 4 [17].9-15, 17-24; 5 [13].4-28; 6[14].1-22 他多数), 天使たちを通して神に願いをすることはなく、天使たちの執り成しの働きにも言及しない。この文書はむしろ、神が万物の創造主であることを強調し、天使たちを含む天の諸勢力が神の創造の業であると述べる (1QH 9 [1].8-13; 18 [10].2)。神は比類なき存在であり、当然に天使に優越する (1QH 15 [7].28-29)。ここには天使崇拜の現象は全く見られない。

### 3.2.4 『安息日の犠牲の歌 (4QShirShabb; 11QShirShabb; MasShirShabb)』の天使論

この文書において天使たちは、「御使い (מלאך)」 (4Q403 1.i.1; 1.ii.23; 4Q405 17.4, 5; 19.7; 20.ii.9; 23.i.8; 49.3; 81.2; 4Q407 1.3) とも呼ばれるが、以下に見るように他の呼称の方がより頻繁に使用される。

<sup>20</sup> Davidson, 194-196.

例えば、天使は「霊 (רוח)」と呼ばれる (4Q400 1.i.5; 1.ii.5; 4Q403 1.i.44; 1.ii.1, 3, 7, 8, 9, 10; 4Q404 5.1, 5; 4Q405 6.5, 7, 8; 14-15.1, 2, 4; 17.3, 5; 18.1, 3; 19.2, 3, 4, 5; 20-22.10, 11; 23.i.9-10; 23.ii.6, 7, 8, 9)。この用法は、先に見たように他の死海文書にも見られるが (1QS3.25; 1QM 12.9; 4QBer<sup>a</sup> [=4Q286] 2.1 を参照), 『安息日の歌』における使用頻度は目立って多い。他方、天使たちは「聖なる者たち (קדושים)」とも呼ばれる (4Q400 1.i.3, 15; 2.1; 4Q403 1.i.31, 41; 4Q405 6.2, 5; 11.2; 23.ii.6, 7)。この天使の呼称は他の死海文書や (1QM1.16; 12.1, 8), ユダヤ教黙示文学にも見られるが (ヨベ 31.14; エチ・エノ 9.3; 15.4; 47.2), 『安息日の歌』における用例は使用頻度が他に比して非常に多い。

他方, אלים (神々) と אלוהים (神々) が天使の呼称として用いられていることも、この文書の用語法の特徴をなしている。『安息日の歌』にしばしば現れる אלים (神々, 神的存在) という表現は (4Q400 1.i.4, 20; 1.ii.17; 2.7; 4Q401 14.i.5; 4Q402 4.8; 4Q403 1.i.21; 1.ii.26; 4Q405 14-15.i.3), 天使たちを王である神を中心にする天上の宮廷を構成する王侯たちのイメージで捉えている (特に, 「神々の神 (אל אלים)」4Q403 1.ii.26; 4Q405 14-15.i.3 を参照)<sup>21</sup>。この表現は、他の死海文書においても時折、天使の呼称として用いられるが、『安息日の歌』程の使用頻度は認められない (1QM1.10, 11; 7.7; 1QSb 2.5 を参照)。

אלוהים という名詞は (マソラ本文の正書法では אלהים), 語形は複数形であるが、意味の上で単数名詞 (神) として使用される場合と、複

<sup>21</sup> 拙稿「死海写本『安息日の犠牲の歌 (4QShirShabb; 11QShirShabb; MasShirShabb)』の天使論」『オリエント』第41巻 (1998年) 65-77頁を参照。

数名詞の意味(神々)で使用される場合とがある。旧約聖書において、この言葉が意味の上で単数名詞として使用されるときは、専らイスラエルの神ヤハウエを指す(創1:1-10; 28:12; 出20:1-2; 22:27; イザ2:3; 35:4; エレ10:10; ホセ4:1; 6:6)。これに対して、『安息日の歌』はしばしばこの言葉に複数形の意味を込めて、天使たちの呼称として用いている(4Q403 1.ii.6; 4Q405 6.5; 14-15.i.5, 7; 19.i.4, 6; 20.ii.11)。この形が天使に適用されるのは、旧約聖書においてはごく限られた例外的箇所にはしか見られない(詩82:1, 6; 97:7, 9を参照)。『安息日の歌』がאלוהים(神的存在, 神々)という言葉で天使たちの呼称として頻繁に用いているのは特異なことである。しかも、この文書は、旧約聖書ではヤハウエに対してしか用いられない、אלוהים חיים[生ける神(々)]という表現を(申5:26; エレ10:10; 23:26)、天使たちに対して適用している(4Q405 14-15.i.5; 19.4, 6; 20-22.ii.11)。この事実は、この文書において天使の神性が強く意識され、天使が崇拜されていたことを反映しているのであろう(1Q401 14-15.i.7を参照)。

この文書における天使崇拜が最も強く表れているのは、次の箇所である<sup>22</sup>。

「あなたの栄光を知識のאלוהים(神的存在)と共に讚美し、

あなたの御国を聖なる存在の間で頌える。

彼らはすべてのאלוהים(神的存在)の間で栄光を帰され、

<sup>22</sup> L.T. Stuckenbruck, *Angel Veneration and Christology* (WUNT 2.70; Tübingen: Mohr, 1995) 156-161を参照。

人の集まりで畏敬されている。

אלוהים (神的存在) や人間たちよりも、彼らはその御国の威厳をその  
知るところに従って宣言し、彼らは高く挙げられる。

その支配に属する天である。いと高きところにおいてすべての  
( ) に従って素晴らしい讚美の歌を

אלוהים (神的存在) の神の栄光を、彼らは( ) 住まうところ  
において宣言する。

どうして私たちは、彼らの間に数えられることが出来ようか？

どうして私たちの祭司職が彼らの住まうところで (考慮されよう  
か)

彼らは聖である。・・・塵である私たちの舌を אלוהים (神的存在) の  
知識に (比較することが出来ようか?)」 (4Q 400 2.1-7 私訳)

この箇所前半は、天使たちの中でも高い地位を持つ大天使たちが、  
אלוהים (神的存在) と呼ばれる天使たちの間で栄光ある者とされ、人間  
たちには畏敬の対象となっていることを示している<sup>23</sup>。後半は天使た  
ちに比較して人間が相応しくないことや、人間の祭司職は天使の祭司  
職に比較しようがない程貧しいことを述べ、塵から採られた存在であ  
る人間の舌は聖なる存在である天使が持つ知識にかなわないと語る。

この文書はこれらの神的存在 (= 天使たち) が天の宮廷において、天  
の王である神に従属し、神を讚美する役割を与えられていると考える  
ことによって、ヤハウエ信仰と調和させていたと考えられる。神の主

<sup>23</sup> Davidson, 252.

権と優越性は、この文書においても維持されているが、神の存在は背景に退いており、天の宮廷・神殿における天使たちの祭司的活動が関心の中心になっている。ここには、唯一神論の原則は維持されながらも、神ではない天的存在である天使たちが崇拝されることで多元的構造を内包する結果となっている<sup>24</sup>。もし、天使崇拝が高じて天使礼拝に到れば、モーセの第一戒の違反になるのであり、コロサイの信徒たちへの手紙ではキリスト教徒の一部に広まっていた天使崇拝が非難され(コロ2:18)、黙示録では、天使自身が自分を礼拝の対象にすることを禁じている(黙19:10; 22:8-9)。「安息日の歌」は天使に祈りを向けることまではしていないので、天使礼拝の域には達していないが<sup>25</sup>、天使を称賛する「安息日の歌」の天使論は(4Q400 2.2; 4Q401 14.1.8を参照)、唯一神論の前提の下に許容される天使崇拝の限界に近付いていると言える。

「安息日の歌」の天使論は、天使たちの間に階級差が存在することを前提にしている。この文書において主だった天使たちは **נשיאים** (君々) と呼ばれて、他の一般の天使たちとは区別されている(4Q400 1.ii.14; 3.2.2; 4Q401 3.3; 14.ii.6; 23.1; 4Q403 1.i.1, 6, 10, 17, 18-19, 21, 23-24, 26; 1.ii.20, 21; 4Q405 3.i.12a; 3.ii.6; 8-9.5-6; 13.2-3, 4-5,7)。**נשיאים** (君々) は **ראשים** (司たち) とも呼ばれている(1Q401 14.i.6; 4Q403

<sup>24</sup> この構造を、W. Horbury, "Jewish and Christian Monotheism in the Herodian Age," in *Early Jewish and Christian Monotheism* (ed. L. T. Stuckenbruck; London: T. & T. Clark, 2004) 16-44 は、包摂的唯神論 (inclusive monotheism) と呼ぶ。

<sup>25</sup> この点を捉えて、L.T. Stuckenbruck, "'Angels' and 'God': Exploring the Limits of Early Jewish Monotheism," in *Early Jewish and Christian Monotheism* (ed. L.T. Stuckenbruck; London: T. & T. Clark, 2004) 45-70 は、「安息日の歌」において天使礼拝はなく、唯一神論は維持されているとする。



1.i. 1-32; 1.ii.3, 11, 16, 20, 24, 34; 4Q405 4-5.2; 23.ii.10, 11, 12)。この **ראשיים** (司たち) とは、ダニエル書以来ユダヤ教黙示文学に登場する大天使たちのことである (ダニ 8: 15-17; 9: 21-23; 10: 13, 21; 12: 1; トビト 3: 17; 5: 4-17; 6: 1-9; 9: 1-6; 11: 14-15; 12: 6-15; レビ遺 3: 5-8; エチ・エノ 9: 1; 10: 4, 9, 11; 19: 1; 20: 1-6; 40: 8-10; 54: 6; 71: 9, 13)<sup>26</sup>。

この大天使たちは『安息日の犠牲の歌』では、**כוהנים** (祭司たち) [マソラ本文の正書法では **כוהנים**] と呼ばれている (4Q400 1.i.3, 8, 17, 19, 20; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 20-22.1)<sup>27</sup>。大天使たちは天の王である神の王座に近付くことが出来る特権を与えられており、「内奥の祭司たち (**כוהני קרב**)」(4Q400 1.i.8, 17, 19; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 20-21.1) あるいは「内奥の聖なる者たち (**קרושי קרב**)」(4Q401 16.3; 4Q402 9.4) と呼ばれている<sup>28</sup>。彼らは天の祭司として、神と一般の天使や人間たちの間のとりなしをする務めが与えられていた<sup>29</sup>。一般の天使たちは天の神殿・宮廷にあって神を讃美し、神を称えて歌うことが求められているだけであるが (4Q400 1.i.1-2; 2.1; 4Q403 1.i.30-35, 36-39a, 39b-40, 41-46; cf. 1QM12.1), 神によって祭司に任じられた (4Q400 1.i.3-4, 8), 7人の大天使は (4Q403 1.i.1-7), 神の玉座に近づいて

<sup>26</sup> A. S. van de Woude, "Fragmente einer Rolle der Lieder für das Sabbatopfer aus Hille XI von Qumran," in *Von Kanaan bis Kerava* (hrsg. v. W. C. Delsmann et al.; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982) 311.

<sup>27</sup> 4Q401 11.3 には単数形の **כוהן** が見られる。

<sup>28</sup> マソラ本文の **קרב** (「近さ」, 「内奥」) は、死海写本では **קרושי** と表記される。この点については、E. Qimron, *The Hebrew of the Dead Sea Scrolls* (Atlanta: Scholars Press, 1986) 65 を参照。

<sup>29</sup> 拙稿『『安息日の犠牲の歌』とヘブル書1-2章』『教会と神学』第33号(2001年)1-22頁を参照。

(4Q400 1.i.6-10)、神へ犠牲を捧げ (4Q403 1.ii.27-29)、民の罪の赦しのためにとりなしをなし (4Q400 1.i.16-18)、神の名によって天使たちと義人たちに祝福を与える (4Q403 1.i.16-28; 4Q405 3.ii.6-10)。

他方、『安息日の犠牲の歌』は神の意思は隠されていると考え、神の意思を知るためには神によって啓示される特別な知識 (דעת) が必要であると考えている。そこで、この文書は神をしばしば「知識の神 (אלוהי דעה) と呼んでいる (4Q400 2.8; 4Q401 11.2; 4Q402 4.12; 4Q405 23.ii.12)。神に直接近付いてその知識を伝授される特権を持つのは大天使たちであり (4Q400 1.i.6; 2.7)、彼らは「知識の神々 (אלי דעה) (4Q400 2.1, 8; 4Q403 1.i.31,38; 4Q404 4.7; 4Q405 23.i.8), 「知識と真理と正義の霊 (רוחי דעה אמת וצדק) (4Q405 19.4) とも呼ばれている。この知識に基づいて彼らは、天使たちや義人たちに神の戒めの真の意味について教える (4Q400 1.i.17; 4Q401 14.i.6-8; 4Q405 13.5; 23.ii.13)。

初期ユダヤ教文書や初期キリスト教文書 (特に、黙示的傾向が強い文書) において、天の神殿・宮廷において礼拝が行われ、天使たちが神を讃美する場面が描かれることは決して稀ではない (レビ遺 3: 5-8; エチ・エノ 40: 3-5; 黙 4: 1-5: 14; イザ昇 7: 15; 1QM 12.1-5; 11QPs<sup>a</sup> 26.12)<sup>30</sup>。他のユダヤ教文書において、天使の祭司的働きに言及する例も少数だが存在する (トピト 12: 12, 15; レビ遺 3: 5-8; ヨベ 1: 27-29; 2: 1; 31: 14; エチ・エノ 47: 2; 99: 3)。しかし、大

<sup>30</sup> M. Weinfeld, "The Angelic Song over the Luminaries in the Qumran Text," in: *Time to Prepare the Way in the Wilderness* (ed. D. Dimant / L.H. Schiffman; Leiden: Brill, 1995) 135-157 を見よ。

天使たちが「祭司」と呼ばれ、神の名によって祝福を与える例は他にはない。大天使たちの祭司職を強調する点は、『安息日の犠牲の歌』の顕著な特色の一つであると言える。

ここで注目されることは、文書の中に描かれている天使による天上の礼拝と、クムラン教団の祭司と会衆たちによって行われる地上の礼拝が同時的であることである<sup>31</sup>。天使たちによる天上の礼拝と地上の人間の礼拝が同時的に行われるという表象は、既に旧約聖書中の一部の讚美の詩編に萌芽的に認められ（詩 148: 1-2）、『安息日の歌』においてそれが一層強化された形で出て来る。天の祭司である大天使たちは、「罪から悔い改めた者たち」であるクムランの会衆のために罪の贖いのためにとりなしを行い（4Q400 1.i.16）、天上の天使たちと共に地上の義人たちを祝福している（4Q403 1.i.16-26）。天の司たちである大天使たちは、天の軍勢と共に地上の礼拝に参加している会衆によって崇拜されている（4Q400 2.2; 4Q401 14.i.8）。天の祭司たちは天上の神殿で神に犠牲を捧げているが（4Q405 23.i.5-6; 23.2; 26-27）、最大の捧げ物は昏によって捧げる神の讚美である（4Q403 1.ii.26-27, 33; 4Q405 23.ii.12）<sup>32</sup>。神を讚美する天使たちの舌は強力であり（4Q403 1.ii.27-

<sup>31</sup> A.M. Schwemer, "Gott als König in den Sabbatliedern," *Königsherrschaft Gottes und himmlischer Kult in Judentum, Christentum und in der hellenistischen Welt* (hrsg. v. M. Hengel / A.M. Schwemer; Tübingen: Mohr, 1991) 48; H. Lühr, *Thronversammlung und preisender Tempel*, in: *Königsherrschaft Gottes und himmlischer Kult in Judentum, Urchristentum und in der hellenistischen Welt* (hrsg. v. M. Hengel/A.M. Schwemer (WUNT 55; Tübingen; Mohr, 1991) 202.

<sup>32</sup> J. Strugnell, "The Angelic Liturgy at Qumran—4QSerek Sirôt 'Olot Haššabat," *Congress Volume: Oxford 1959* (VTSup 7; Leiden: Brill, 1960) 335; van der Woude, 332 が、天上の礼拝において天使が捧げる犠牲のことだけに注目して、讚美の捧げ物に考慮を払っていないのは一面的である。

29), 彼らが語る祝福の言葉は「奇跡の言葉 (דברי פלא)」として称揚されている (4Q403 1.i.1,4,11,16,22,24,25; 4Q405 3.ii.5; 13.5; Mas1k 2.23,25)。死すべき人間が神に捧げる礼拝には限界があることをクムラン共同体の人々は自覚しているが (4Q400 2.6-10), 彼らは地上の礼拝を通して, 神的存在である天使たちが行う天の礼拝に参加することが出来る (この観念は, 1QSb 4.24-26; 4QBer<sup>b</sup> 2.12; 11QPa 26.9-12 にも見られる)<sup>33</sup>。こうして天使たちによる天の礼拝は, クムラン共同体の祭司たちが行う祭儀行為に正統性を与え, 天の祝福を付与する働きを持ったと考えられる<sup>34</sup>。

#### 4. 結論：唯一神論と天使論の緊張関係

クムラン教団が神と天使たちで構成される天上の世界の实在を信じ, 自分たちの共同体が天使たちと共にいると確信していた点は, 多くの死海文書に表れている (1QH 19 [11].28; 23 bottom [2.1].10; 1QS 3.22; 1QM7.5-6)。死海写本において天使たちは天的存在として, אלים (1QH 3 [11].8; 15 [7].28; 23 bottom [2.1].3; 24 [18].8; ), または, בני אלים (1QH 11 [3].22; 23 [2].3; 25 [45].10-11) と呼ばれる。これらの天的存在である天使たちは, 神ではなく, 天の宮廷において, 天の王である神に従属し, 神を讃美する従属的役割を与えられている (4Q403 1.ii.26-27, 33; 4Q405 23.ii.12)。死海写本全般にお

<sup>33</sup> Strugnell, 320; van der Woude, 332; C. Newsom, *Songs of the Sabbath Sacrifice: A Critical Edition* (Atlanta: Scholars Press, 1985) 18.

<sup>34</sup> Strugnell, 320; van der Woude, 332; Newsom, 18.

いて唯一神論は基本的に維持されていると言える。

『感謝の詩編』に収録されている詩編の多くは、義の教師によって率いられた祭司的集団が、死海のほとりに共同体を築いた初期の時期に由来するのであり、そこでは神に直接に祈り求め、神の世界への直接の介入が期待されている。この時期は紀元前2世紀から前1世紀中葉にかけてのハスモン王朝期にあっている。『感謝の詩編 (1QH)』は、一貫して、神に直接祈り求めている (1QH 4 [17].9-15, 17-24; 5 [13].4-28; 6 [14].1-22 他多数)。この文書の中に天使たちの執り成しの働きへの言及はなく、天使崇拜の現象も見られない。天上の宮廷・神殿における天使の存在は前提されているにしても、祈りを向ける対象は神であり、祈禱者は創造主であり、贖い主である神が与える憐れみと恵みに直接訴える。天上の世界における神の主体性は維持され、唯一神論は多元的構造を内包するにしても中心に向かう求心力によって統一が保たれている。

『安息日の歌』はその書体の分析から、ローマ帝国の傀儡であるヘロデ王とその末裔がユダヤを治めていたヘロデ王朝期 (37 BCE-100 CE) に由来し、死海文書としては後期文書にあたる<sup>35</sup>。『安息日の歌』は、天上で行われる安息日礼拝の様子を定型的表現を用いながら描く。神を讃美の主題は出てくるが、讃美する天使たちの姿や大天使たちの祭司的活動を三人称で描写することが中心である。そこでは、天使の神性が強く意識され、天使が称讃の対象となっている (4Q400 2.2; 4Q401 14.i.8 を参照)。『安息日の歌』の天使論は、唯一神論の前提の下

<sup>35</sup> C. Newsom, *Songs of the Sabbath Sacrifice: A Critical Edition* (Atlanta: Scholars Press, 1985) 18-20.

に許容される天使崇拜の限界に近付いていると言える。『安息日の歌』はマサダの砦からも出土しているので、この文書に見られる天使論は、クムラン教団のみならず、当時のユダヤ教の一部に広まって観念を反映していると見るべきであろう。この時期には、世界への神の介入はより間接的になり、神と人との間を仲介する天使の役割が前面に出て来る。天使たちによって構成される多元的構造の遠心力を、ヤハウエを中心とする唯一神論がぎりぎりの線で押さえ込んでいる。『安息日の歌』は、ヘロデ王朝期のユダヤ教の天使崇拜がもたらした唯一神論の危機を伝える文書であると言える。